

ところが、どうした事でしょう。歩いてても歩いてても坂下の部落にたどり着くことができません。とうとうどちらが西なのか、東なのかもわからなくなってしまうました。空を見上げるといくら歩いててもお陽様は同じところにあるのです。

やがて気がついてみると、今までのどかに鳴いていたカッコウ鳥の声も止んで、黄昏の色がしのびよるなかに、溪川のせせらぎが、さらさらと流れるばかりです。

疲れきった脚を溪川の水にひたしながらサメザメと涙にぬれた小夜姫は、やがて里帰りをあきらめて、とぼとぼと日隠山の彼方糠塚長者の嫁ぎ家に引きかえました。

「美女泣せかい、おらんとこでは、美女流しとも云ってない、こねいでも採ったワラビを上げて拜んで来ただよ。」

里の古老はこんなに語りました。

「下の長者様かい、なんでもなあ、むかし下の里にあった家が中の里に家移りしたときだと、荷物を馬につんでいるうちに、とうねっこ（仔馬）がいなくなっとなあ、親馬は仔馬がいないのでやかましく嘶くのでこまっていたところ、しばらくして、仔馬が片脚を引きずるようにして帰って来たので、怪我でもしたかと思ってしらべたら膝から下がベットリと漆で固まっていただと……。」